
流羽奈わーるど

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流羽奈わーど

【コード】

N91930

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

とにかくぐちゃ混ぜな企画。前書きを読んただければ分かるかと……。出場作品はこちら BLEACH / 銀魂 / 戦国BASARA / 鋼の錬金術師 / etc

01 前書き

あれです。

もう完全なる、今まで魅せたことのない流羽奈ワールド全開な感じで。声優ネタ、他のアニメネタ、とにかくごちゃまぜ。

ぶっちゃけると筆者がね、テンションあがっちゃってね、やりたくなっちゃったわけです。

えーと、たぶん短編集っぽくなります。

だからどこから読んでも話は理解できる……はず！！

キャラのイメージは壊しませんよ。それは保障させていただきま

す。
ご自由にコピペしたりなんなりしちゃってください。まあそんな方はいないと思いますが……（いや、マジでコピペするときはコメントとかメッセージとかほしいんですけどね。

えーと、まあいいや。

とにかく……

いいぜ！ 見てやるよ！！（*・・）b

って心広い方はどうぞ見てってください

普通のシリアス雰囲気ぶち壊しの新しいタイプの小説……というか寧ろ小説とは違うものになっております。

と、言うわけで、わたくし流羽奈に対するイメージが変わってしまつかもしれません……。

そんなわけで、どうぞ気になる方はお次へどうぞ！！

02 座談会（銀魂＋BLEACH）

「えーと、じゃあそんなわけで！ 今回は親睦会という名の飲み会を開いちゃいましょうっ！」

司会進行役、志村新八が明るく言い放ったところで、場の空気が凍りついた。

というか、もともと凍っていた。

それを温めようとしたら、逆効果だったわけである。

「あの、すみません。俺一応高校生って事になってるんですけど」
黒崎一護がおずおずといった感じで手を上げつつ言う。

というか、「一応」って何なのだろう。

「あー、気にすんな。そっちは真面目な漫画だからそういうのやんねーと思うけど、こっちは新八も沖田も飲んじまってるから。そーゆーの気にしない方向で」

坂田銀時がすでにビールに手を付けて、顔を少し朱に染めつつ、一護に手を振った。

一護はやや困惑しながら、

「いや、だって法律的にさ」

「そんなもん気にしてたらそちらさんだってさ、かなり公共のもの壊してるでしょ。それまずくない？」

ぐいっとジョッキを傾けて、一気に空にした。

新八は、心の中でまずいぞ、とつぶやく。

銀時の酒を飲むペースがもうめちゃくちゃ、かなりおかしい。

もともと酒に弱い銀時がこんな短時間でジョッキを空にしてしまうという事は、それだけ早く暴走が始まってしまふということだ。まずい。それは阻止せねば。司会進行役の名に懸けて。

……あれ？ 金田一？

「でもよ、そつちもかなり壊してねえ？ 俺が知る限りよろず屋の玄関って数回はぶつ壊れてるぜ？ 警察長官マフィアみたいな感じだし」

「あー、まあそれは銀魂ですから」

「しょーがないしょーがない、と新八は苦笑交じりに言った。

「そーそー、じゃあそーいうわけだから一護くん、飲んじゃって飲んじゃって。今日は仲良く男三人、腹割って話そーぜー」

一護にビールの瓶を差し出す銀時。

「いや、別に俺飲みたくねえわけじゃねーけどさ。原作的に大丈夫かどーか……」

「へーきへーき！ こんなもんだの二次創作だからさ」

「根本的に否定しちゃったよこの人。前書きにちゃんと書いてあったのに。キャラは壊さないって書いてあったのに」

新八の突っ込みも、もはや映えなくなってきた。というか、勢いが無い。

この黒崎一護という少年。

よく考えればボケなのかツッコミなのかわからない種族である。もともと原作がシリアスなBLEACHなのだから、それも仕方ないといえばそうなのだが。

それにしてもだ。厄介なキャラクターすぎる。ふわふわと不安定な立ち位置については新八のツッコミもうまくそれを捕えることでもできずに不発に終わってしまう。

まあつまり爆発しないのだ。

一護の特性は「しめりけ」であろう。

「ていうかさ、座談会にしちゃこれ読みにくくね？」

「え？ そーか？」

新八の不安な気持ちもよそに、銀時は一護のグラスに並々とビールを注いでから、そう呟く。

一護も呑気に返答していて、完全に新八が居なくても場が成立していた。

Chicken新しいCDが……」

新八「お前はどーして筆者が嫌っている人物の真似をしながら会話に入ってくるんだ！」

一護「あー、疲れた。家帰りたい」

新八「止めて下さいよ！ 完全にキヤラ壊れてる！ ていうか筆者の嫌いな人のモノマネはしなくていいから！ ネガティブにならないで！」

一護「え？ じゃあアレか、自分の自慢話でもすりゃいいのか？」

新八「やめて！ それ以上筆者のプライベート語らないで！ つか何！？ 何で一護くんはそんなノリノリなんですか！？」

一護「俺こっとういうノリ嫌いじゃねーぞ。クラスの奴としょーもないこと話す時はこんなテンションじゃねえと」

新八「クラスの奴って話してるシーンほとんど原作で描かれてねーじゃん！ 筆者の妄想じゃんそんなの！」

銀時「うるせえな、こーゆードロドロした内輪ネタも入れねーと文字数が足りねえんだよ。筆者の嫌なプライドのせいで、三千字は書かなきゃならねんだから」

一護「いやー、俺こんな感じでグダるの好きかもしんねえな。今度ケイゴと水色で久々にグダるか」

銀時「じゃー俺は長谷川さんとグダるかな。酒たかろう」

一護「長谷川さん？ ああ、剣ば……」

新八「黙ってるお前はアアアア！！ 中の人の話を持って行くんじゃねえエエエ！！」

銀時「あ、そうだ。今度そちらの映画でうちの多串君がお世話になりますー」

一護「いやいや、こっちこそ妹が毎日世話になっちまって……」

新八「だから止めるって言ってるだろうがアアアアアア！！！」

銀時「そして最後の最後になって新八の息が切れ始めたのだった」

一護「あと少しなのになー。惜しい」

新八「え、何この最後な感じ？ お終いなのか？」

銀時「そして音量は徐々に下がっていくのであった」

新八「え？ ラジオ？ これラジオ？ 音量とかあるの？」

一護「三千字越えちまったからなア。筆者も疲れたんじゃねえの？ こうやって言い逃れたいんだよ」

銀時「あ、じゃあ次回予告しとこーぜ」

新八「まだ字数稼ぎしますか」

一護「えーと、次は……っと。あ、やべ。これまずいぜ、坂田さん」

銀時「え？ 何？ 何がやばいんだよ？」

一護「いやいやいや、これ可哀想だな。盛り上がらないって、絶対」

銀時「あ、マジだ。これやつべーぞ、可哀想だ」

新八「どんな事になってるんですか？」

銀時&一護「ほら」

新八「……これ、まずいですね」

一護「これいいのか？ よくねえだろ、これこそ三千字いかねえよ」

銀時「そうだな、コイツの心の叫びだけでいくんじゃねえのか？」

新八「あの人もこのメンツの中じゃツツコミに回るしかないですもんね。流石にボケられないですよ、このメンツは」

一護「まあこれ以上焦らすのもアレだからいい加減次回予告に入ろーぜ。何だかんだで三千五百字いつちまってる」

銀時「あー、そうだな。ってことでハイ、司会進行役の新八くん」

新八「あ、ここだけ仕事ふるんですか？ たく自分勝手な人達だな……。じゃあお伝えします。次の座談会メンバーは……日番谷

冬獅郎、朽木白哉、土方十四郎、以上の三人です」

銀時「じゃあこんな感じでそろそろ解散！」

一護「それじゃ俺このまま虚退治にでも行ってくるかな」

銀時「じゃあ俺はジャンプ読んでくる。だから新八、オメーは定春の散歩な」

新八「だからの使い方おかしくないですか？ あれ、ちょっと！
待って下さいよ！」

そうして彼ら三人の座談会はぐだぐだに終わっていくのであ
った……。

03 座談会（BLEACH+銀魂+その他諸々）（前書き）

遅くなっちゃってスイマセン。言ったでしょー不定期って（殴

て来い」

あんまり飛ばしすぎたら逮捕させてもらうぜ、一応警察だからな。なんて心の中で言いながら、俺はあつという間に煙草一本を吸い終っていた。やけにまずく感じる。

少年は携帯をまたいじり、耳に当てる。先程よりも幾分かリラックスした口調で話し始めていた。

「うるせえな、ガチャガチャ言ってるじゃねえよ。ああ？ 警備員が邪魔だア？ テキトーなトコから入って来いよ」

テキトーって何！？ つーかてめえン家じゃないよねここ！？
「ふう」

一段落終えたのか、その少年……確か日番谷、とか言ったか。名前が一緒なのはまあ置いておこう。とにかく日番谷は軽く吐息をつき、俺の正面に居る長髪の男に視線を向ける。

朽木白哉。

奴の名前だけはやけに知っている。何故か？

前の話から座談会に使われているこの会場は、奴の邸宅のある一部屋だからだ。

招待状を貰った時から流石に俺の足もすくんだぜ。まさか武州から出てきた田舎者の俺が、こんなでけえ屋敷に要人でもなく警備でもなく、ただただ遊びに来れるなんざ到底思ってたからな。

「このメンツ、何で集められたか知ってるか？」

「……兄は知っているのか」

二人で話し始める。

……え？

ちょっと待て、何で俺だけ蚊帳の外！？

いや確かに俺だけ同じ漫画じゃないけれども！！

でもさ、同じ集英社として仲良くしてやろうっていう気持ちは皆無ですか！？

俺今そっちで活躍してやってんじゃん！！ 映画出てやってんじゃん！！ 何だよ、そんなに俺のこと気に喰わない！？ そんなに

その馬はそのスピードを維持したまま襖を壊しつつ隣の部屋まで滑り込んで着地して、馬蹄を響かせる。

無論、馬が一頭でこんなところに、こんな華麗ともいえる着地をするわけがない。しっかりと、その馬に腰を据えて座っている人物が居た。

その人物は慣れた形でひよいととも簡単に馬から飛び降りると、「おいおい、なんだよこの空気？」

腕を組み、ふてぶてしく俺たちの前に立った。

どうやったらお前みたいな空気を読めない人間になれるんだ。

この沈黙の中平然と立つてられるのはテメーだけだぜ。この場での天下はお前のモンだ、よかったな。

……じゃなくて……！！！！

「せっかくの party だ、もつとテンションあげてこー……」

「何で来てんだよテメーはアアアアアッ！！！！！！ ていうか何でフル装備！！？」

俺はやつと声を発する。

目の前にいるのは何の事はない、伊達政宗だ。 戦国 B A S A

R A の。

「おいテメー B A S A R A からは来ないつつてなかったか！？」

よく分からない怒りを日番谷にぶつける。

その少年は涼しい目をこちらに向け、

「確かに来ねえとは言ったが、それは俺と」

俺、つまり上杉謙信を指しているんだろう。

「朽木んとこだけだ。誰もてめえのところが来ねえつつった記憶はねえぜ」

なんだこのクソガキ……！！ この冷めた感じがイラ付く……！！

なんでこんなちつせえのに冷めてんだよ！

「cool 過ぎるにも程があるんじゃないかねえのかア？ そのガキ」

「！！」

流石は中の人と同じだけの事はある。

言いたい事は同じだったみてーだ。

「ガキだあ……？ てめえ……せつかく呼んでやったのにその口ぶりはねえんじゃねえのか……？」

「呼んだ、ねえ……。どつちかって言や、俺が来てやってるんだがな。このチビ」

「だっ……」

日番谷の額に青筋が浮かんだ、刹那。

「誰がミジンコだアアアアッ！！！！」

政宗の足元の床がメキメキと音を立って膨らむ。それは一気に鋭くなつて、政宗を突き刺そうと上空へと伸びた。

だが相手が悪かった。戦国大名、奥州筆頭伊達政宗。伊達に戦国時代を生きてる奴じゃない。

反射と勘と、全ての神経を研ぎ澄まし、その攻撃を見事にかわしきつた。

政宗は呑気に口笛を吹きながら、

「いいねエ、この攻撃」

鋭く眼光を光らせる。

まずい。

俺は本能が示すままににこいつから距離をとった。

「アンタ、名前なんてんだ？」

「エドワード・エルリック。国家錬金術師だ」

襖の置くからちらと見えた黄金の髪が風に流れる。

ていうかお前ら、破壊しすぎだろ、この家を。

日番谷がやや驚いたような表情で、

「おいおい、ちょっと待てよ。お前、何で錬金術使えんだ？」

原作じゃ使えねえだろ。なに設定変えてんだ、と何やらお怒りの声が聞こえる。

「うるせーよ、やっぱこー……周りが死神やらなんやらだとな、こつちも特別な何かがねえと敵わねえと思って……」

パンツ、と手を打つ音が聞こえる。

ていうか何このぐちゃぐちゃ感？ 俺が購読してるのマガジンな
んだけど、ついてけないんだけど。

「うおつとオ！！」

再び戦争開始。

俺は呆然とその様子を見つめ、こんな状況なのに落ち着きまくっ
ている朽木に視線を走らせた。

「……………」

「……………何か言いたげだな」

鋭い視線に、俺は射抜かれる。

何だよ、この洞察力？

「いや、こんなに荒らされて大丈夫なのか？」

「問題ない。この程度の修繕費など大したものではないからな」

「あ、そつすか」

もう既に半壊してるんだけど、この屋敷。

それで大したもんじゃねえとかためえマジでどんな神経してんだ！

おかしい。色んなアニメが混ざりすぎていよいよ俺もおかしくな
ってきたか。

ダメだ、とにかくマヨネーズでも飲んで…………。

俺がマヨネーズを引っ張り出したとき、後ろでなにやら不穏な音
が鳴り響いた。

その音に政宗と絶賛戦闘中のエドワードがこちらをくるりと振り
返って、

「あ、マイルズ少佐！ とりあえず伏せろ！」

俺マイルズじゃねえよ！ 中の人つながりで色々固有名詞変える
のやめてくんねえ！？

とか文句を垂れている場合でもない。俺は仕方なくその場にしゃ
がみ込む。

途端に壁が崩れて、

「また面倒な奴が来たな」

政宗の言つとおりだ。

「だから、何でこんなに設定いじってんだよ!!」

「しょーがねえだろ、こうもしねーとこが盛り上がらねえかと思つて……」

俺はその場で硬直。

「来たか」

朽木の凍てつく声。おかしい。どうしてこの現場でそんな落ち着いた声が出るんだ。アンタの肝はどこに据わってんだよ。

「スカー」

ああ、一期の声はアンタが当ててたんだっけ。

うん、一期だとこの男、死んだ設定だったよな。確かに設定を弄りすぎだ。ていうか俺、この位置やばくねえ？ 確実に目エ付けられてねえ？

「避けとけ、十四郎」

「うるせえ解つてらア!」

政宗に言われるまでもねえ。

こいつ……やべえつて!!

俺も戦争に参加。

こんなぐちゃぐちゃしながらもいつの間にか三千五百字を越える事実な。よし、俺よくやった。

ああ、次回予告?

えーとだな、確か……銀魂、BLEACHでまたやるらしいぜ。

メンツはどうなるか未定。……ああ、けど俺がでる事は確かだ。それから万事屋と総悟と……まあそんなもんか。

じゃあ俺はとりあえず……逃げる!!

04 反省してませんが後悔してません。さあ、読もうか！（一護＋銀魂）

一護「えーっと、ああ、俺司会だった。はい、今日は一切中の人の話とか無しの方向で盛り上がるうと思いまーす。準備はいいかい？」

銀時「いいねえ、結構パーソナリティ似合ってるよ」

一護「まーこういうのも悪くねえからな。そんなじゃ、本日のゲストをご紹介。じゃ、まずはウチのメンツから順に……ああ、そうだった、今日はウチのメンツ居ねえんだっけ？」

銀時「そうそう。いないんだよ、そちらさんのメンツ。何でかーって言うとな、俺たちの愚痴を聞いてもらうためにわざわざウチまで来てもらってるだけだからね、一護くんには」

一護「愚痴って、そんな溜まつてんのか？」

銀時「あー溜まつてる溜まつてる。例えばよオ」

一護「うおおい！！？いきなり木刀投げつけんじゃねーよ！！あー天井に穴開いてんじゃねえか……」

銀時「はい穴の中よく見てー。何か居るからよく見てー」

一護「……ん？……うおおおっ！！？何で人居んだよこんなところに！！？」

銀時「俺の愚痴そのー！ ストーカーに付きまとわれている」

猿飛「酷い！ 酷いわ銀さん！！ 私はストーカーじゃない！

アナタの守り神よ！」

銀時「うるさい黙れ何が『ストーカーじゃない』だ。前自分はストーカーだって認めてたじゃねえかコノヤロー」

猿飛「違うの！ 私あれから考え直してみたの！ そしたらやっぱり、違うかなって……」

銀時「ていうかオマエさあ、名前の所『猿飛』ってなってるんだけど。一瞬誰か分からねえんだけど」

一護「しよーがねえよ坂田さん。『猿飛』にしねえとカギカッコ

の位置が合わなくて読みづらくなるかもしれないなって読者の事を少しは考えてる作者の僅かな心遣いだ」

銀時「心遣いってオマエ……もう既に小説の形完全に無視してこうしちゃってる時点でかなり読みづらいからね!? ああつ、ていうか臭い! オマエ臭い!! 何この臭い、納豆!?!」

猿飛「そう、そうよ! もっと私を貶して!!」

一護「あ、そういう人なんだこの人」

銀時「そーなんだよ! だから追っ払ってもこうやって来やがるんだ! くそつ、だけこのメス豚!」

猿飛「ああつ、銀さん、その言葉を待っていたわ!」

一護「坂田さん、アンタ素がSだから駄目だ。もうこの人から逃れらんねーよ」

銀時「素がSだア!? ナメんなよ、俺なんかよりもつとSな奴がこの世界には居てだな……」

沖田「呼びましたかい、旦那」

一護「おわっ!」

銀時「俺の愚痴その二! 色んな人が勝手に俺の家に入り込んでくる!」

土方「勝手につて……鍵かけてねーのが悪いんだろ」

銀時「俺の愚痴その三! どういうわけか俺と大串くんのきわどい表紙してるDVDがやけによく売れる!」

一護「いや、それ売り出してねえだろ。つか、あれ? 猿飛さんは?」

沖田「紐、縄、鎖……どれが良い? 選ばしてやるよ」

猿飛「やめて! 私がメス豚モードになるのは銀さんのときだけよ!」

銀時「……まあ、あんな感じで」

一護「ああ、確かにSだ。超D級のSだ。だって持ち歩いてるもんな、紐とか縄とか鎖とか」

銀時「ったく……おーいストーカー」

猿飛「何、銀さん？」

銀時「いいからためえは……出てけ!!!」

一護「うわっ、痛そ……」

土方「……おい公共物破損罪だ。ためえを逮捕する」

銀時「うるせえな、俺は破損させてねーぞ！ あの女がぶつかったのが悪りいんだ!!!」

沖田「あー、この縄とかどうするかな……。……あ」

一護「……」

銀時「うん、ナイス縛り、総一郎くん」

沖田「総悟です、旦那」

土方「おいテメエらアアアアアアアアアアッ!!!! 何考えてんの!?! 何で俺縛られてんの!?!」

一護「……まあしょうがねえんじゃない？」

土方「なんでオマエまで諦めてんだよ!? つーか何でちよつと笑ってるの!? 腹立つんだけどコイツ!!!」

銀時「俺の愚痴その四。どーいうわけか俺とコイツがCPになる」

沖田「まあ土方さんDMですからねイ……仕方ないっちゃあ仕方ねーですよ。俺だってコイツとCPになってますもん」

土方「俺だって好きでなってるわけじゃねえけど!? 読者が好き好んでやってるだけだけ!?」

銀時「いや、まあ読者がそうやってやってくれるって事は銀魂を愛してる故での事だと思っただけだね、俺だって好き好んでコイツを縛ってるわけじゃねえっていうか……」

沖田「遊びの一環でさアね」

一護「あれ、坂田さん原作で土方さんのこと縛った事あったっけ?」

沖田「俺が一回首輪つけたことならありますぜ」

土方「アレははめられたね、うん!!! ホント殺してやるうかと思っただよあれは!!!」

銀時「愚痴その五」

土方「俺の言葉無視!？」

銀時「銀魂にはマトモな女がない」

一護「そうかあ? にしてもこれ固く縛ってあんな……土方さん、もーちよい我慢してろよー」

銀時「そーだろ。だってよく考えてみ、BLEACHとこっち比べてみ?」

一護「いや、こっちだって結構色々性格に難がある奴居るぜ? よし、取れた」

銀時「じゃあ今からこっちのメンバーで具体例挙げてくからBLEACHで当てはまる奴を探してみる。絶対エ居ねえから」

一護「おう、探してやる」

銀時「お妙みてーに無駄に強い奴」

一護「……それはこっちの世界だと全員に共通するな」

沖田「んーじゃ、超ドMは? さっきの女みてえな」

一護「ど……ドM? ああ、じゃあそれならネルかな。自分で言ってたし」

土方「悪い意味で無駄にいい性格してる女は居るか?」

銀時「なんだそれ、お妙のことだろ、かぶってるじゃねえか」

土方「違いえよ馬鹿野郎」

沖田「土方さんの過去の経験でさア」

土方「それも違いよ!」

銀時「あーまあいいや。はい、答えてー」

一護「ルキアだな。アイツはミス猫かぶりだ」

銀時「じゃ、無駄に食う奴」

沖田「こっちでいうチャイナの事ですねイ」

一護「井上」

沖田「常にイラツと来る奴」

土方「おいてめえなんでこっち見てんだよ!? もう女限定じゃなくなってるじゃねえか!」

一護「それは居ねえけど……」

土方「無視!？」

銀時「ほーれ見るオ、そっちの方が良い女沢山居るんだよ」

土方「ほれ見ろってオマエ、最後の質問完全に俺の事指してたらからね!？ 女のこと全然指してねーから!！」

沖田「そうだな、俺アそっちの世界だと伊勢七緒って奴とか結構好きだぜイ」

一護「へえ、結構堅物そうだけどなあ……。総悟、あーというのがタイプなんだ」

沖田「いや、プライド高そうじゃん、アイツ。あの自尊心的なやつを一回へし折ってやれば簡単に調教できそうだなって」

一護「そっちかつ!！」

沖田「あとはー……。ああ、井上織姫。あいつは簡単にイクだろうな」

一護「お、おい？ 表記の仕方間違っって……」

銀時「ちよつと待てエエエエ!!! 織姫ちゃんは俺のもんだ!」

一護「俺のもんって、もともとアンタのもんじゃねえしな」

土方「おいおい、あの井上って女はその黒崎に惚れてるんじゃない……」

銀時「うるせーよ!!! 織姫ちゃんは何があるって俺のもんだ!」

沖田「旦那、下心見え見え」

銀時「あ、でも松本さんもいいよなあ……」

一護「……」

土方「おい、なんか呆れられてるぞお前」

銀時「うるせえええっ!!! この世界にいい女が居ねえのがいけねえんだ!!! 大体一護っ! てめえ高校生ならこういう魅力的な女に発情しねえわけが」

一護「いや、しねえな」

銀時「嘘オ!?!？」

土方「まあそういうキャラクターだもんな」

沖田「その割には女の裸見て顔真っ赤ですがね」

一護「うるせえっ！ あれはあの……あれだ、不意打ちなのが悪い！」

沖田「あれあれ、一護くん、顔が真っ赤じゃねーですかイ？」

銀時「何だよ、オマエやっぱキャラクター作りしてたのか？」

一護「してねえって！！ 元々キャラ作りとか興味ねえし！」

土方「でもよ、オマエ……こつこつ積上げてきた俺のイメージが、みたいな発言してなかったか？」

一護「あーしてましたね！！ してました！ 解ったよ、キャラクター作ってたって言えばいいんだな！！ なんだよ俺縄外してやったの馬鹿みてーだな！！ 俺への恩は一切無しか！！」

銀時「年頃の男の子だぜー？ ウチの新八と曲がりなりにも同年だ。とてもそうは見えねえけど」

一護「え、そうなのか？」

沖田「ついでに言うとな俺の二個くらい下」

一護「あー悪り、思いつき呼び捨てにしてたな」

沖田「いや、別に上下関係は気にしねーんでいいんですが」

土方「そうだよな、ホント気にしねーよな、お前」

銀時「そんな訳で色恋の一つもねーってのはおかしいわけで」

一護「そーかあ？」

土方「まー妹も居るしな。そこんとこ気にしてんじゃねえ？」

沖田「妹って言や、一護ンとこの妹、両方とも後々化けやすぜ、多分」

一護「なんだあんたら！？ こつちの女キャラはそういう目で見えねえのか！！？」

銀時「ほんとになんもねーの？」

一護「ないない！ ちつともない！」

土方「初心だな、おい」

沖田「アンタにや言われたくねーですよ、土方さん」

銀時「女で相当遊んでるくせになれねーもんな、お前」

土方「あア!? お前に俺の何が分かるんだよ!!!?」

銀時「解りますー、隅から隅までお前みたい男は解りますー。もー夜とかあんな乱れ方しちゃってさア……」

土方「お前と遊……いや、とにかくそんな事した記憶はねえよ!!!」

銀時「遊ぶ? はあ、やっぱり女とは遊んでると。いいねえ、羨ましい男だねー」

一護「坂田さん? なんか言い方すつげえ怖いんだけど。抑えて抑えて」

土方「うるせえっつ!!」

沖田「あれ、どーしたんです土方さん? 顔真っ赤。……もしかして、誘ってるんですかイ?」

土方「え、ちょ、何お前まで変なスイツチ入れちゃってんの? 時間帯考えろよ! そして俺たちの枠は週刊『少年』ジャンプだ!!!」

沖田「虐めちゃってもいいーい? 答えは聞いてないっ」

一護「……声優ネタ、しねえって言わなかったか?」

銀時「まーこっちはそういう世界ってことで……それに、あいつの虐めるはマジでイジメだから、ただの」

一護「ああ、R指定が入るようなヤツじゃないと」

銀時「おうよ。そこまで行かねえさ、流石に。て・い・う・かさ?」

一護「な、何だよ……。変な声出しやがって……」

銀時「R指定を知ってるって事は……そういう知識があるんだよな? てエことは……」

一護「読んでない上に見てない!!!」

銀時「俺の愚痴その六。家に神楽とか新八が居るせいでそーいったもんが見れない」

一護「知るかっつ!!!」

彼等のしよーもない談笑はまだまだ続く……。

05 異常なまでにふりーだむ（一護＋銀時）

一護「……何で俺？」

銀時「いや、俺もやる。でも俺とお前じゃなんかアレだから、お前とその他モテそうな男子、三人くらい用意して。こっちも多串くんとか総一郎くんとか高杉とかそこらへんの連中に声かけっから」

一護「いや、俺、女口説いたことねえんだけど。あんたと違って」

銀時「一護くん、言葉慎んで。俺だって酒の力なしに女口説くなんて真似したことねーよ？」

一護「……酒飲まして口説いてんのか、アンタ」

銀時「いや、違うからね！？ 飲ませてべろんべろんになったところをテイクアウトしようなんて思っただけからね！？ むしろ俺はその場からこっそりテイクオフしてるからさ！」

一護「何で飛んでんだよ」

銀時「とにかくそーゆーことだから。全員にやってもらうから」

一護「嫌だっつってんだろ。面倒だからな」

銀時「あのな、これくらいの場数は踏まなきゃ大人になれねえぞ？」

一護「だったら俺は一生ガキでいい」

銀時「『だったら俺は一生馬鹿でいい』みたいな言い方やめてくんない？」

一護「すげ、さすがジャンプ毎週読んだけのことはあるな」

銀時「なめんなよ。毎週買ってんだ、これでも。立ち読みしてる奴とは意気込みが違うんだよ」

一護「俺もたまーに買うけどな。たまーに」

銀時「それ以外立ち読みかよ……」

一護「しよーがねえだろ、まだ高校生だし」

銀時「高校生なア……俺がお前んくらいの時は暴れまわってたぜ」

一護「攘夷なんたら、ってやつか？」

銀時「おー。派手な喧嘩は好きだったんだが……ゲリラだ爆破だ
ってちよつとずつ規模が小さくなってきてな。やめた」

一護「へえ」

銀時「なんだよ、その目」

一護「いや、アンタにも何か……自分の中のルールっての？ そ
ーゆーんがあるんだな、って」

銀時「まーな。これでも銀さん、頑張ってるから。色々」

一護「それなのにどーしてアンタは彼女の一人も居ねえんだよ」

銀時「テメーに言われたくねえんですけどコノヤロー」

一護「なんだかんだで周りに居る女性陣からはアンタ、モテてん
のになあ」

銀時「だからな、ちげーんだって、こっちに居る女どもはどっか
ずれてるっつーか、なんつーか、口説く気になれねえっつーか」

一護「ふーん」

銀時「なんだよその生返事!？」

一護「いや、口説く気になれねえってことは一回でもあいつを口
説いてみようか、とか考えた奴の台詞だな、と思って」

銀時「違うよ!？ 違うからね!？ ちよつと口説いてみようか、
なんて考えたことないからね!？」

一護「……あ、そ」

銀時「なんだよそのがっかりした表情？ さすがに発情期か？
誰かしら口説いてみてーんじゃねえの？」

一護「いや、んな事は思ってない」

銀時「冷めてやがんなー、つまんねえガキだぜ」

一護「うるせえ」

銀時「あ、じゃーよ、ちよつとお前、口説いてみねえ?」

先頭に戻る 無限ループ

一護やその他諸々のキャラクターが女を口説くところを見てみ

たい 妄想にお任せします

読んで損した コメントで苦情受け付けます

05 異常なまでにふりーだむ（一護＋銀時）（後書き）

いや、でも実際乙女ゲーみたいな小説を銀魂で書いてみようかなと
か思ってますよ、ええ。

でも恋愛ものは書いててこっちが恥ずかしくなるから苦手です……。

流羽奈さんの恋愛ものは見てられませんか……。

そんなわけで、恋愛もの小説はまだまだ投稿する気にはなれません。

06 作者の代わりに謝罪（一護＋銀時）

銀時「もー筆がすすまねえよ」

一護「あ？ 坂田さんなんか書いてんのか？」

銀時「違う。作者の代弁」

一護「……まあ長らく放置してるもんな」

銀時「だろ？ あれは俺どうかと思うんだよな。だって待つてくれる人居るし。『命を懸けて』とか何年かけてんだよ。これでぽっくり作者死んだら中途半端で終わっちゃうだろ」

一護「藍染と冬獅郎は氷付けのままです丸の真意も解らず」

銀時「そんでもって『雪桜』なんかお前と母ちゃんの対面があつてあれ？ 石田は何しに行ったの？』ってなってる状態だろ。つまり今それぞれの小説が停滞してるわけ。いやはや、ずばらにもほどがあるだろ」

一護「まあネタにつまってるわけじゃねえんだろうけど」

銀時「お？ 肩持っちゃうの？ そこ肩持っちゃうの？」

一護「いや、持たねえとこれただの自虐対談になるだろ。読んでくれている人居るかどうかも怪しいのになと自虐し続けてたら首長くして待つてくれる人に悪いし」

銀時「なんかもう俺達マリオネットじゃん！！ 作者の大便してるばっかじゃん！！」

一護「字イ違う字イ違う。やめる下品なネタ」

銀時「一護くんもいつの間にかツッコミが達者になっちゃうて！ 誰がここまで育て上げたと思ってるんだ！」

一護「悪りいな、俺は久保帯人に育てられてんだよ！」

銀時「よく言うな、二次創作のくせに！」

一護「ベースは原作沿いだっ！！」

銀時「俺なんかキャラクター確定してねえんだぞ！！ ベースがふわふわしてんだよどうしてくれんだ！！」

一護「しるかよっ！ てめえの作者に言いやがれ！！」

銀時「嫌ですー！！ だって俺絶対作者の自己投影だもん！！ むしろ作者だもん！！ やだもー俺絶対結婚できないでしょう」

一護「どうしようって言えば、やっぱり今後の進度だよな」

銀時「無理矢理っ！！ すげえ無理矢理だよこの子！！」

一護「このとろさじゃ流石に飽きられる。でも筆が進まない。ってことは辛うじて読んでくれてた人が居なくなるってわけだ。それじゃあ流石に作者のメンタルが持たない」

銀時「ごめん、無視されてる俺のメンタルも持たない」

一護「だから作者は考えたわけだ。『そっいえば流羽奈わーるど』があるな、って。これを有効活用しない手は無いだろうと考えたらしい」

銀時「一護くん？ お前優しい子じゃなかったっけ？ 斧二本折って謝ったりとかよだれかけて怪我治したりとかしてなかったっけ。おかしいな、久保先生に育て上げられたならもうちよっと優しくしても」

一護「それぞれの小説の更新を早めることは出来ねえが、どうでもいい話なら書ける。そう踏んだんだな」

銀時「ねえ、無視？ 流石に銀さんここまで無視されるとキャラクター壊れてくるよ前立腺ブレーキとか言っちゃうよ」

一護「つまり作者のボキャブラリー不足が今のスランプ状態を作り出してんだ。だから、ちよっとの間どうでもいい話で繋げてちよっと更新を待ってもらおうと。それが作者の真意なんだよ」

銀時「前立腺ブレーキっ！！ 前立腺ブレーキいいいっ！！」

一護「だからこの『流羽奈わーるど』、基本毎日更新にしようと思っつてよ。どうでもいい小話ばかり。それもキャラクターめちゃくちゃ。だって作者のわーるどだからな。もう形振り構うかって感じだよな、ここまでくると」

銀時「前立腺ブレーキ前立腺ブレーキ前立腺ブレーキ前立腺ブレーキ前立腺ブレーキ」

一護「そんなわけではんどごめんな。作者の技量不足でこんな事になっちまってっけど、許してやってくれ。放置してるわけじゃねえんだ。絶対完結させるって思ってるみてえだからよ、気長に首長くして温かい目で見てやってくれねえか？」

銀時「前立腺ブレーキ前立腺ブレーキぜんりつしえっ……」

一護「噛んでんじゃねえよ。ていうかさつきからうるせえ」

銀時「うるせええええっ！！ てめーあれくらい無視されてみる！！ 泣けてくるぞ！！ だって出番ねえんだもん！！ そりゃあくれるわ！！ 悲しくなるわ！！」

一護「おいお前……いきなり過去篇入ったかと思えば監染たちが現世に進軍してきて全然出番なかった俺の気持ちわかるか？」

銀時「……………」

一護「主人公だぞ！！ それなのに出番ぜんねえの！！ それこそ『ずっとスタンばってました』だろうがアアアッ！！」

銀時「お前……お前……ちょっと万事屋空けてたせいで俺の存在が丸々なかったことにされた俺の気持ち解るか？ あれめっちゃ悲しいぞ！！ すげえ孤立無援なんだからな！！ お前にこの気持ちか」

一護「解るに決まってんだろ！！ お前第三弾の映画見たか！？ fade to black 見たか！？ 俺完全に忘れられてたからな、死神全員敵に回してたからな！！」

銀時「じゃあ戦友をなくす気持ち解るか！？ わかんねーだろ！！ あれめっちゃくちや辛いぞテメー！！」

一護「……………」

銀時「（よし、勝った！ あぶねえあぶねえ。俺が口喧嘩で負ける
ところだっ）」

一護「…………市丸」

銀時「……………」

一護「あいつ……すげえいい奴だったよな、今思つと……」

銀時「（え、なにこの空気？）」

一護「力不足で闇雲に突っ走ってる俺に遠まわしに逃げろって言うたり、俺が藍染に匹敵する能力を持つって解つてたから挑発したり……なんで死んじまつたかな……。ウルキオラもだ。あいつ　絶對暴走した俺を殺そうだなんて思つてなかった。止めようとしてたんだ。石田も井上も居たあの空間で、俺は敵味方の分別もつかなくなつてて……。あいつは身体張って俺を止めてくれた。多分アイツとはもつと違う出会い方してりゃきつと……。仲良く……」

銀時「あーはいはい！！　わかつたわかつた！！　もういいから！！　ごめん、俺が悪かつたごめん！！」

一護「坂田さん、あんたすげーよ……。きつとすげー辛い思いとかしてんのにそんな明るく振舞えるなんてよ」

銀時「ああ？　急に何言つてんだよ。死んでつた奴の分も楽しく生きなきゃあの世であいつ等にあわせる面がねえだろーが」

一護「強ええな」

銀時「ていうか何？　俺つてけつこ強いからさ、結構たくさん命奪つちやつてるわけ。だから間違つても極楽なんかいけねーじゃん？　死んだ後地獄送りになるなら今の世で楽しんでやるう的な？」

一護「現世で行つた所業は消せないからなー。死神が浄化できるのは虚になつてからの所業だけだし」

銀時「ねえ、そこ混同するのやめよう？　訳解らなくなるから。お前の世界と俺の世界は違うんだつてば」

一護「……虚になつたアンタも癖毛なのか？」

銀時「知るかアアアアツ！！　死ねつてか！？　今すぐ死ねつてか！？」

一護「とりあえず魂魄抜き出して鎖切つてみるか。心配すんな、虚になつたらちゃんと責任もつて俺が新月で斬つてやる」

銀時「死ぬじゃん！！　俺死ぬじゃん！！　それこそ即刻地獄送りじゃん！！」

一護「コクトーによるしくな」

銀時「『よろしくな』じゃねえよ!! 多串くんがいいじゃんそれ!!」

一護「あれ、世界の混同はダメなんだろう?」

銀時「お前言ってること無茶苦茶!! 日本語話せる!? 国語得意なんだよね!?!」

一護「よし、じゃあとりあえず浦原さんここに」

銀時「いやああああっ!! 辰馬ンとこいやああああっ!!!!」

一護「あ、じゃアルキア?」

銀時「きゅーべーくんのところはもつといや!! 変態居る!! 変態いるから!! あと限無寿限無ウンコ投げ機一昨日の新ちゃんのパンツ新八の人生バルムンク!! フェザリオンアイザック!! シュナイダー三分の一の純情な感情の残った三分の二はさかむけが気になる感情裏切りは僕の名前をいつているようではないのを僕は知っている留守スルメめだかかずのここえだめだか……このめだかはさつきと違う奴だから池乃めだかの方だか? らー油ゆうていみやおうきむこうペペペペペペペペペペペペペペペピチグソ丸もいるからダメ!! 俺が肥溜めになる!!」

一護「あ、そうか、お前のトコ市丸居んじゃん」

銀時「もーホントいや!! 混沌としすぎてる!! やめて、ほんともうやめて!! 中の人ネタもうやめよう!! 飽きられる!! ほんとに飽きられる!!」

一護「……ん?」

銀時「え?」

一護「……ああ、いいや」

銀時「は?」

一護「多分、似たような感じになるんだろうな」

銀時「何事故解決してんの、なんなのこの子?」

一護「いや、ほら。仮面の軍勢の」

銀時「あ、六車拳西!!」

一護「あんな感じか」

銀時「いや、知らないけどお前がそれで納得するならいいわ」

一護「……みたいな感じでぐだぐだと話を書いていく予定らしいぞ」

銀時「……………」

一護「まあ毎日は無理だとしても更新頻度は高くするつもりらしい。こんな駄作でよけりゃ読んでやってくれな。コメントとかくれると作者もテンション上がって頑張ろうってなるらしいし」

銀時「もしかして俺踊らされてた？」

一護「それじゃ、今回はこのくらいで。じゃな」

銀時「……………」

一護「ほら坂田さんもなんか言えよ」

銀時「前立腺ブレーキいいいいっ!!!!」

06 作者の代わりに謝罪（一護＋銀時）（後書き）

そんなわけで、ホントスイマセン。

ネタにつまってるわけじゃないです。頭の中には出来てるんですが、それを文章にするだけの能力が私に無い……（泣）

今回はお二人に謝っていただきました。いや、謝ってないけど。よかったらこちらのほうも読んでいただけるとありがたいです。面白いかどうかは置いといて、流羽奈の微妙な素が見え隠れすると思います

それでは、また。

07 方針説明 (BLEACH + 銀魂 + BASARA)

銀時「そんなわけだ」

一護「今回はアンタが仕切るのか」

銀時「前の話散々だったからな。今回の手綱は俺が握らせてもらう

！」

一護「なあ坂田さん」

銀時「はいはいなんですか、文句なら過去の自分に」

一護「あそこに手綱握ってない奴居るんだけど」

土方「いやだから、お前それは危ねえだろ。いくらなんでも無茶だ
つつの」

政宗「ha！ 何言ってやがる、こつちのがcoolだろうが！」

黒刀「そーそー。クールクール」

土方「クールってお前……それで走り出すんだろ、崖から飛んだり
するんだろ。風圧とか考えろよ振り落とされるわ」

政宗「hmm……これだから困るんだよな、素人は」

土方「しろっ……」

政宗「いいか、これくらいで振り落とされるなら奥州筆頭なんか出
来ねえんだよ」

黒刀「そもそも本人がそのスタイルでやってきてんだから好きにや
らせりゃいいだろ？ 今までそれでやってきてんだからいきなり落
馬なんざしねーって」

政宗「いいねエ、お前とは気が合いそうだ」

黒刀「そりゃどーも」

土方「オイお前ら、どっかぶっ飛んでるだろ、製作過程でねじ外れ
てるドラえもんじゃねーんだからちゃんとしてくれって」

銀時「テメー一人で何やってんだアアアアアッ！！」

土方「いつてエエエツ！！！！」

銀時「何一人芝居繰り広げてんの！？ 一人芝居って言うかむしろ
独り芝居だわ見てて悲しくなんだろうがっ！ 友達居ねーのか、居
ねーんだろ、なってるか友達に！！ 絶対嫌だけどね！！」

土方「こっちだって願ひ下げだわ！！ テメーと友達になるくらい
だったらマヨネーズと結婚するしイイ！！」

一護「アンタそれ本望だろうが」

銀時「そーだそーだ！！ 俺だつて結婚するならパフェ……いや、
むしろ結野アナと結婚するしイイツ！！」

土方「それまんまテメーの希望だろう！！」

一護「いや、アンタもだつて。アンタもマヨネーズと結婚したいだ
ろ」

銀時「つーか製作途中でねじ外れてるってテメーもそうだからな！
錆びないようにオイルさしてんだろ、マヨネーズがそのオイルな
んだろ！」

土方「螺子どころか作品が出来上がってすらいねえテメーにんな事
言われる筋合いねえよ！」

一護「あんたらと比べられちゃドラえもんに失礼だつつの。ねじ外
れてるくせに毎年のようにどっかの星だの国だの時代だの救ってる
からな。あんたら何も救えてないだろ。救えて金魚だろ辛うじて」

黒刀「おいおい、俺をドラえもん並べんなよ」

一護「うおっ、いきなり入ってくんなよ、読者も対応しきれねえだ
ろ！」

政宗「……なんだあのcrazyな連中は……？」

一護「俺も解らねえんだよなア……」

黒刀「なんだよ、あのクルクルの方とは仲良いんじゃないの？」

政宗「頭がhappyな感じだな」

銀時「テメーらアアアアアッ！！ 今俺の悪口言つたる！！」

黒刀「いや」

政宗「てめーの悪口なんざ吐いた覚えはねえな」

一護「アンタすげえな」

土方「敏感すぎて気持ち悪リイ」

銀時「あれエ……何でいつの間にか銀さん一人ぼっち？ 一護オオオオツ！！」

オオツ！！ お前だけは仲間だと思つてたよ！！」

一護「いやア……一応俺、黒刀と面識あるしな……。それにこの三人敵にするくらいだったら坂田さん敵に回すわ、悪いけど」

銀時「回りに流されんな！！ 今の日本の悪いとこだよそれ！ 自

分の意志を貫けよ！」

黒刀「解つた。じゃあ一護、鎖切つてくれ」

一護「意志の貫き方違えよ」

政宗「で、なんで俺はこんなところにいるんだ」

土方「あー、実はな、いろんなアニメごっちゃでジャンル問わずの小話をやるうと思つてんだつてよ」

銀時「何こいつ等聞き分けられないんだけど」

黒刀「気持ち声色低いのタバコ、ちよっとトゲトゲしてんのが眼帯、適当そつなのが俺」

一護「それサジ加減だよな、作者の」

黒刀「まあそうとも言つか」

銀時「多串くん、小話つて何？ 俺聞かされてないんだけど」

土方「言葉だけで展開される起承転結ありのお話」

一護「それ今の状態じゃねえ？」

政宗「こんだけぐつぐだな story なんざ聞いたことねえがな」

黒刀「あれだろ、もっと簡潔にしたいつてことじゃねえの？」

一護「あー、四コマ漫画の言葉版、みたいな感じか」

銀時「馬鹿言つてんじゃねーよ！ 四コマ漫画は絵があつて何ぼだろ！ 絵がなきゃ何も面白くねえよ！」

土方「だから、文字だけでどこまで出来るかつていう限界に挑む」

銀時「無茶しすぎだつて、無謀だよそんなもん！」

一護「手綱離して盗んだ軍馬で走り出すよりはマシじゃねえ？」

政宗「ありゃあ無謀じゃねえ！ あの riding style に慣れときゃ軍馬の上でも六爪が振るえんだろ！」

黒刀「まず片手に三本ずつつてのが無謀だと思うぜ」

銀時「そもそも三刀流でも無理があんだ、刀六本腰にぶら下げてる
ところから既に現実化不可能だろ」

一護「なんか他キャラ出てきたな」

土方「頼むから中の人ネタやめてくんねえ？」

黒刀「まあなんだかんだ俺も刀と鎖武器に出来るから二刀流になる
つちやるか」

政宗「鎖の時点で二刀じゃねえ。Are you OK？」

一護「鎖一本を一刀で考えたらお前やばいじゃねえの？」

銀時「その貴重な武器を破壊した一護くんは逆にそれ自分の身助け
たことになるね」

一護「まあ俺その時の記憶ねえけどな」

政宗「ah？ 鎖を切るたあすげーじゃねえか。ちよいと一発、や
りあつてみねえか？」

一護「おつ、いいな、たまには違う相手とやるのも」

銀時「わあ、この会話、変換によっちゃすげー卑猥。一護くんすげ
ーチャラ男ー」

一護「え？」

黒刀「まあ多分一護は誰とやりあう時も下……」

土方「ああアアッ！！ 本編に入らせる！！ いつまでたつても進
まねえっ！！！ つーか万事屋アアッ！！ 未成年ばつかのこの空
間でそーゆー話題やめろ、しょっ引くぞテメー！！ それから黒刀
も乗つかるな！！ そのオレンジ頭がついていけてねえだろうが
！！！」

一護「……さんきゅー、土方さん」

政宗「いんやア？ 戦国時代とか江戸時代なんかじゃ衆道関係はむ
しろ当然のモンで……」

土方「そこだけ史実に則るんじゃないやねえ!!」

黒刀「それこそ新撰組もそういう集団じゃねえの?」

土方「悪かったな、俺は『真選組』だつ!! つーかどっちのしんせんぐみもそんな集団じゃねえよ!! 誤解を招くような発言をするな!」

銀時「まあまあ、これも一種の愛情表現だろ?」

政宗「そんな悪いことでもねえつて」

土方「てめえら後で公然猥褻で逮捕してやるから覚悟しとけよ……」

一護「……で、その、小話の事なんだけど」

土方「ああ? ……だからつまり、できるだけ短く小話をぽんぽん作りたいつて事だよ」

黒刀「なんか説明雑じゃねえ?」

土方「誰のせいだと思つてんだ!!」

政宗「おいおい、coolに行こうぜ?」

土方「うるせえよつ!! てめえの名言をここに突っ込むなもつと大事に使え!!」

一護「土方さん、タバコ新しいの吸えつて」

土方「ああ、そうする」

銀時「それで、だから?」

土方「だから、むちやくちや短い話を会話だけでぶち込むつてことだつて何回言えば解るんだよ」

一護「……まあやつてみりゃ解るんじゃないの?」

政宗「practice makes perfectつてやつだな、OK」

一護「習つより慣れる、な」

黒刀「へえ」

神楽「銀ちゃん、お月様欠けていつてるヨ！　ウサギさんが消えてしまっネ！」

銀時「あー？　大丈夫だろ、平気平気」

神楽「銀ちゃんは兎さんが消えてもいいアルカ！　夜兎にそんなこと言っつていいと思っつてるアルカ！」

銀時「ウサギもてめーら夜兎と同じだろ、太陽光が辛くなってきたんだよ。ちよつと地球に護ってもらっつるだけだから心配すんな」

銀時「ほほう……。俺、なかなかカッコいいこと言っつてるじゃねえか……」

土方「なんかむかつくな」

黒刀「ウケは狙わねえの？」

銀時「こういうのはウケを狙おうとすると逆に失敗して終わることが多いんだよ。こういうほのぼのの系も悪かねえ」

一護「ほのぼの系、ねえ……」

政宗「で、こういうのをいくつか詰め込んだ奴をやるってか？」

土方「作者はそう考えてるみたいだけどな」

銀時「続かねえよ、絶対」

一護「やってみなきゃ解らねえだろ」

黒刀「ま、続かなくなったらまたこんな風に対談形式になるんだろうけど」

政宗「hmm……」

土方「どうした？」

政宗「なあ、こんな chat なんぞ見てて面白いのか？」

一護「やべ、初めて独眼竜から正論だ」

銀時「そもそもアレだろ、これだけ登場人物出てくると空気になっちまうよな、誰かしら」

黒刀「この人数ならまだ何とかなっつてんじゃねーのお？ むしろこの場で」

政宗「おい、もっかい俺の名前呼んでくれねえか？」

一護「あ？ 独眼竜？」

黒刀「ほら」

政宗「あ、お前あれじゃねえか？ 前田の」

土方「だああああっ！！ shat up！」

銀時「一番壊れちゃいけない子が壊れちゃった。やべえ、どう進行すんだよ」

黒刀「困った時のあんただろ？」

銀時「俺？」

黒刀「少しは主人公らしいところ、俺に見せてくれよ」

銀時「何この子。多串くんとは違った意味でイラツとくる。この気の抜け方なんかかぶってる。銀さんちよつとジェラシー」

銀時「そんなわけで、次から小話が始まるらしいぜ。期待しすぎない程度に期待してやってくれや」

黒刀「俺の出番ってあると思うか？」

銀時「さあ……？ ちよつとくらいはあるんじゃねえ？」

土方「万事屋アツ！！ 何勝手に進行してやがんだっ！」

銀時「だっつてお前らが勝手に突っ走るからよお……」

土方「そんなもんやる暇あるならこっち手伝いやがれ！！」

黒刀「手伝うってどうしたよ？　なんか問題でも……」

鰻屋「一護オオツ！！　アンタバイト来ないと思ったらこんなトコで何やってんだっ！」

一護「うええっ！！？　イクミさん！？　アンタこそこんなトコに何しに来てんだ！」

まつ「こら慶次！　早く帰りなさいとあれだけ言ったではありませんか！　こんなところだなにをやっているのです！」

慶次「わああっ！！　ごめんまつ姉ちゃん！！」

政宗「おいまして前田の風来坊！　ここであつたのも何かの縁だ、一勝負やるうぜー！！」

一護「こんなトコで刀振り回すんじゃねえっ！　危ねえだろーがっ！」

慶次「おっ、奇遇だね！　俺もそう思つたトコ！」

まつ「逃がしませんよ慶次！」

鰻屋「逃がさねえぞ一護！！」

慶次「ついでだから一緒に逃げるか」

一護「……お互い似た境遇だな」

慶次「独眼竜っ！　悪いんだけど、ちょっと待ってる！　まつ姉ちゃん撒いたら戻ってくる！」

政宗「テメーも大変だな、この色男！」

慶次「うるせーよ伊達男！」

一護「おら！　さつさと逃げっぞ！」

政宗「おいorange頭！　オメーも戻って来い！　面白そうだ！」

一護「つたりめーだ！　売られた喧嘩なら買ってやる！」

鰻屋「上等だア！！　じゃああたしの喧嘩も買ってもらうおっじゃねえのー！！」

一護「アンタのはお断りだつてのー！！」

銀時&黒刀「……it's crazy……」

07 方針説明 (BLEACH + 銀魂 + BASARA) (後書き)

……わあ、ぐだぐだ (苦笑)

長くなつてしまい申し訳ありません (^^) ;

多分次回らへんからちよつとずつ短くなつていくと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193o/>

流羽奈わーるど

2011年12月11日11時47分発行